

「小学校における『読む』『書く』を取り入れた授業の展開と 小・中の円滑な接続」

深山 大作 ・ 生内 孝幸 ・ 永井 茂雄 ・ 高橋 泰満

小学校高学年の「読む」「書く」を取り入れた授業モデルおよび小中連携カリキュラムについて、小・中それぞれで付けたい力を明確にし、目標を達成のための学習活動について探求する。

はじめに

平成32年度から小学校では新学習指導要領が全面実施となり、小学校3、4年生に外国語活動、5、6年生に外国語が教科として導入される。現行学習指導要領の外国語活動に「読む」「書く」が加わることで、小・中の接続が大きなポイントである。

本研究では、「読む」「書く」を取り入れた授業モデルおよび小中連携カリキュラムについて研究した。

今年度は、小・中それぞれで付けたい力、ゴールをCan-doリストとして設定し、目標達成のための学習活動、手立てについて考えることとし、文教大学教授 金森 強先生にご指導いただいた。

研究の内容

1 研究の基本方針

(1) 綾瀬版Can-doリストの作成

昨年度は指導者用のCan-doリストを作成しており、今年度は児童版Can-doリストの作成に取り組んだ。これにより、児童が「～ができるようになりたい」、「～ができるようになることを目指す」といった自覚や目標をもたせることを目指した。

(2) 目標達成に向けた学習活動

今年度は、北の台小学校で「中学校の英語の先生に自分の将来の夢を英語で伝える」ことを単元のゴールに据えた研究授業を行った。その授業の中で、児童版Can-doの活用し、「書く」(書き写す)ことを取り入れた単元計画や小中連携を促進する取組みなどに挑戦した。また、中学校所属の研究員がゲストティーチャーとして参加し、児童と実際にコミュニケーションをとるという活動も試みた。

2 研究経過

- ・ 第1回(4月)
研究テーマの確認と年間計画の作成。
- ・ 第2、3回(5月、6月)
児童版Can-doリストの作成。
文教大学金森先生と小中連携や「読む」「書く」について協議し、研究の方向性について議論。
- ・ 第4回(7月)
児童版Can-doリストの作成。
- ・ 第5回(9月)
金森先生に児童版Can-doリスト(案)についての助言をいただく。
- ・ 第6回(10月)
県教連発表大会の参加者が他市の外国語教育の研究報告を行い、意見交換を行った。
児童版Can-doリストの作成。
- ・ 第7回(11月)

1月の研究授業の学習指導案の検討。
金森先生に児童版 Can-do リスト
(案)についての助言をいただく。

- ・第8回(12月)
研究授業に向けた学習指導案検討。
- ・第9、10回(1月)
研究授業を行い、研究協議を行った。
金森先生に研究授業の助言をいただく。
- ・第11回(2月)
研究授業についての振り返り。
研究紀要の執筆分担。
- ・第12回(3月)
今年度の活動の成果と次年度に向けての課題確認を行い、次年度の研究の見通しを共有した。

成果と課題

1 成果

(1) 児童版 Can-do リスト (Can-do Sheet)作成

- ・小学校外国語活動の授業から中学校英語科の授業を円滑につなぐため、また単元を見通した授業展開のために児童版 Can-do リストを作成した。しかし、試作したものを実際に小学校高学年の授業で運用した結果、満足 of いく効果は得られず、「字が多い」「わかりにくい」など、多くの改善点が見つかった。その後研究を続け、関心・意欲・態度の観点を追加、また、より児童にとってわかりやすくなるように工夫をした。名前も新たに Can-do Sheet とした。

(2) 小中連携の推進

- ・研究授業では、中学校教員とのT.Tの授業を行った。子どもたちは、習った表現を使って、自分のことを中学校教

員に伝えようと工夫する姿が見られた。

- ・綾小研外国語活動部会と綾中研英語部会との連携を強化した。1学期は綾小研外国語活動部会が綾中研英語部会開催の授業を参観し協議を行い、2学期は綾中研英語部会が綾小研外国語活動部会が開催する授業を参観し、協議を行うことができた。

(3) 「書く」意欲の高まり

- ・「書く」(書き写す)ことを単元の終盤に取り入れた。何度も話したり聞いたりしたことで、英語を書く意欲の高まりが見られた。

2 課題

(1) さらなる小中連携の強化

- ・引き続き、小・中の教員間で英語の授業について共通理解を図り、学習における系統性を高めていく必要がある。綾中研英語部会と綾小研外国語活動部会の連携を足がかりに、より深い連携を進めていく必要がある。
- ・単元を意識した授業展開をより多くの学校で進めていけると良い。
- ・学校によって小学校外国語活動の授業の内容に差が出始めている。中学校への円滑な連携のためにも、早急に共通理解の場を持つ必要がある。

(2) Can-do Sheet の研究

- ・今年度はすべての単元の Can-do Sheet を作成することができなかった。完成を目指して引き続き研究を進める必要がある。

(3) 教材・教具の作成

- ・「書く」「読む」活動をより効果的に行うための教材・教具の作成を進める。